

# 多人数会話における共話的なインターアクションの分析 ——日本語母語場面と日中接触場面の対照——

劉 佳珺

## 1. はじめに

会話は話し手と聞き手の協働的な構築によって展開されている。会話参加者それぞれが役割を分担し、一つの発話を作り上げている。水谷(1980)は、聞き手が相槌を頻繁にうち、話し手と聞き手がいれば一体となって展開していく日本語の話し方を「共話」と名づけている。例えば、(1)では、Mの発話中にSとNがその内容を予測し、先取り発話をして、協働的にMの「進学にはかなりお金の余裕が必要である」という発話を築き上げている。

(1) M: 進学てさ[

S: [かなり余裕が[

N: [お金がね必要だし

会話参加者は単に話したり、聞いたりするのみならず、話の途中で、聞き手が相づちをうったり、質問や確認をすることによって次々と発話を誘発したりする。それに対し、話し手は聞き手の反応によって発話を継続したり、ターンを譲ったりする。このように、話者間の相互行為によって会話が展開されていく。

本研究は4人での会話場面を取り上げ、その共話の種類と話者間のインターアクションの実態について分析する。さらに、日本語母語場面と日中接触場面の特徴を対照し、日本語学習者の言語的コミュニケーション能力についても考察する。

## 2. 先行研究と本研究の立場

### 2.1 先行研究

「共話」という呼び方は水谷(1980)によって提出されたものである。その後、ザトラウスキ

一(2003)は「二人以上の話者が作り上げる統語上の単位(句、節、分、複文)からなるもので、後の話者が先の話者の発話を付け足したり、その発話を完結させたり、先取りしたり、自分の発話に取り込んで言ったり、言い換えたりする発話」を「共同発話」とし、具体的な表現形式から「共話」について説明している。

黒崎(1995)、久保田・西川(2002)は共話の表現形式について、会話参加者が相手への共感を示すために強制的に発話を割り込んだり、オーバーラップしたりする類型を指摘している。また、堀口(1997)は話し手の発話を先後まで聞かないで、話している途中で相づちをうつ「先取り相づち」及び相手の発話がまだ終わっていないところにその先まで予測して、それを話し手が言う前に先取りをして言ってしまう「先取り発話」について論じている。黒崎(1995)は発話の機能の面から共話を「先取り型」「補足型」「助け舟型」「言い換え型」の4つに分類している。これを踏まえ、笹川(2007)は異文化コミュニケーションにおける共話の形式を「笑い、相づち、パラフレーズ、オーバーラップ」「相手と協調関係を志向する共話」「文レベルで起こる共話」「談話レベルで起こる共話」の四つにまとめている。

二人での対話場面に比べ、多人数会話の場面では、一つの話題を作り上げる際、現行話者以外の会話参加者の言語行動及び非言語行動は一様ではない。そこから展開された会話の仕組みも複雑となる。多人数会話場面における各参加者の言語行動について、久米・徳井・徐(2002)は日本人、アメリカ人、中国人の小集団討論場面におけるコミュニケーション様式を比較し、その結果、「日本人は場を盛り上げた人が主導権を獲得する傾向があり、アメリカ人は積極的に相手に質問、確認したりして意見を求め方向付けする人が主導権を獲得し、中国人は自発的に獲得する傾向がある」と指摘している。上田(2008)は日米グループディスカッションの分析により日本語のディスカッションには「頻繁に打たれる相づちとそれに伴う発話の打ち切り」と「複数の参加者が一つの発言を協働して作り上げる」という二つの現象があると指摘している。また、多人数会話の構造について、張(2009)は日中小集団討論における話者交替の視点からディスカッションへの参加状態及び発話内容の展開形態を考察している。中井(2003)、ザトラウスキー(2001)は4人同士の会話場面における各会話参加者の協働的な非言語行動(目線、笑い、うなずき)を中心に考察している。

これまでの研究では、2人のみの会話場面を研究対象としたものが多く、3人以上の会話参加者による会話場面の研究はそれほど多くない。また、共話について、共話の類型、表現形式及び話題の展開様式について、研究されたものが多く、共話の表現形式や分類上さまざまな概念が混在し、統一的な基準はまだ整理されていない。また、共話の捉え方に

について、聞き手を中心とする定義が多く、一人の会話参加者の言語行動がほかの参加者の言語行動に及ぼす影響についてはあまり考察されていない。このように、共話とその後の会話連鎖における会話参加者の相互行為に関する研究はいまだ検討の余地がある。

## 2.2 研究課題

本研究では、先行研究を踏まえ、以下の研究課題を設ける。

- (1) あるテーマを展開させるために 4 人の会話参加者はどのような言語行動をとり、会話を作り上げていくのか。これらの言語行動によってどのような共話の表現形式がなりたっているのか。
- (2) インターアクションの角度から共話の部分における各会話参加者の言語行動が互いにどのように影響をしているのか。
- (3) 日本語母語場面の共話の特徴と比較しながら、日中接触場面の特徴について分析し、その要因を明らかにする。

## 3. 調査内容

### 3.1 データ

本研究は日本語母語場面(母語場面、以下同様)の会話2組と日中接触場面(接触場面、以下同様)の会話2組を分析対象とした。各グループの会話参加者は4人であり、紙に書いた2つのトピックをそれぞれ与え、各トピックについて10分ずつ話してもらった。協力者の許可を得た上で、それをICレコーダで録音した。総収録時間は86分45秒である。

トピック 1: 大学生であるあなたは今の専門に興味を持ち、卒業後は引き続き大学院に進学しようと思っています。それと同時に就職活動をして大手企業から内定をもらいました。社会が不景気の中、これは絶好のチャンスです。あなたは進学するか就職するかどうしますか(1. 進学する/2. 就職する)。

トピック 2: 高校から大学に入って、受験勉強もなくなり、自由な時間もいっぱいできました。好きな授業を選べるようになり、サークルにも参加できます。大学生活において、あなたにとって学ぶべきことは何ですか。あなたは何を勉強したいですか。

表1 各グループメンバーの内訳

グループ	平均年齢(歳)	関係	収録時間(分:秒)
母語場面 1	18.0	クラスメート	23:17
母語場面 2	19.2	クラスメート	22:33
接触場面 1	21.6	クラスメート	20:10
接触場面 2	23.2	クラスメート	20:45

会話参加者は全員大学生か大学院生である。中国人日本語学習者は全員日本語能力試験 1 級に合格し、普段日本語を使って、アルバイトをしている留学生である。日本語母語話者とのコミュニケーションはほぼ支障がない。

### 3.2 文字化資料表記方法

本研究で使用されたトランスクリプトは、好井・山田・西阪(1999)を参考にして、以下のように表示する。

表2 トランスクリプトの記号の意味

?	語尾の音が上がっていることを示す
。	語尾の音が下がって区切りがついたことを示す
[	会話参加者の発話の重なるの始まりを示す
[ ]	発話の重なるの終わり
[[	2 人の話し手が同時に発話を開始する場合
=	途切れなくことばもしくは発話がつながっていることを示す
-	直前の言葉が不完全なまま途切れていることを示す
—	当該個所の音が大きいことを示す
↑	音調が極端に上がっていることを示す
↓	音調が極端に下がっていることを示す
(.)	ごく短い間合いで沈黙していることを示す
(m. n)	数字(n)の秒数で沈黙していることを示す
.hh	吸気音
。。	これで囲まれた箇所の音が小さいことを示す
言葉:	直前の音が延ばされていることを示す
( )	< >で囲まれた文字列は不明瞭な発話
(…)	聞き取れができない発話

## 4. 関連用語の説明

### (1) 共話

本研究では、水谷(1980、1993)とザトラウスキー(2003)に基づき、「共話」という概念を「あるテーマをめぐる、会話を展開させるにあたって、後の話者が先行話者の発話に補足したり、先取りしたり、自分の発話に取り込んで言ったり、言い換えたりする発話」のように規定する。なお、本研究で取り扱う「共話」は会話参加者の「実質的な発話」<sup>1</sup>のみに限定し、「相づち的な発話」<sup>2</sup>と話す途中の非言語行動は分析対象としない。

### (2) 話段

本研究では、共話を考察単位として「話段」という概念を導入する。「話段」とは、市川(1978)、佐久間(1987a、1990a、1992a)、ザトラウスキー(1993)により、内容上のまとまりとして、相対的にはほかの会話内容と区分される会話部分であると規定する。本研究では、内容上まとまっているテーマをめぐる、展開された発話の連鎖を一つの話段と考える。なお、ここで取り上げた「共話」の考察範囲は一つの「話段」を展開させる際の一連の発話の連鎖であり、即ち談話レベルの「共話」である。

1Y:うん:でもさ世の中さそのやりたいことやって、仕事でお金もらうなんてそんなにいな[いからね  
2S: [ ああ、あ

れは難しい° ° ことだよね° ° =

3Y: =そうね。だからそういう意味では、現実的には俺は就(h)職するかと思う。

例えば、1Yの就職に関する発話に対し2Sは「ああ、あれは難しいことだよね」と共感を示している。2Sの共感にしたがって、3Yはさらに1Yの発話を展開していると考えられる。

このように、本研究は共話を考察する場合、一つの話段において、2Sのような「共感的な発話」のみならず、その共感的な発話に基づき、前の話者がどのように自分の発話を展開しているのか、つまり共話的な発話がどのように次の発話に影響を及ぼすかを考察する。

### (3) 会話参加者

会話の進行にしたがって、話し手と聞き手の間で話者交替が行われる。二人の会話場面に比べ、多人数会話場面における聞き手と話し手の識別は複雑である。そして、会話の展開により各会話参加者の役割も一様ではなく、会話への参加度合いも異なっている。本研究は「話し手」と「聞き手」という言い方の代わりに「会話参加者」(participant)という用語を使

<sup>1</sup>「実質的な発話」とは何らかの実質的な内容を表す言語形式を含み、事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話である。(杉戸:1987:88, ザトラウスキー1993:64-65, 84)

<sup>2</sup>「相づち的な発話」とは実質的な内容を積極的に表現する言語形式を含まず、聞き手に積極的に働きかけもしないような発話である。(杉戸:1987:88, ザトラウスキー1993:64-65, 84)また堀口(1997)によると、相づちとは、話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現である。例えば「あー」「はー」「うん」「そう」など及びその組み合わせなどのような応答詞を中心とする発話である。

い、その「会話参加者」の言語行動を分析する。

## 5. 分析と結果

発話機能の面から共話の分類基準を決め、共話的な発話が後ろの会話の連鎖にいかなる影響を及ぼすかを分析する。次に、母語場面と接触場面の使用傾向について分析する。最後に、話段ごとに各会話参加者の言語行動がどのように影響し合うかを明らかにする。

### 5.1 共話の種類

黒崎(1995)は発話機能の面から共話を「先取り型」「助け舟型」「補足型」「言い換え型」「共感型」に分類し、共話の出現の要因に言及した。本研究はその出現の要因のみならず、共話的な発話の出現により会話参加者の言語行動に与える影響についても考察する。

本研究では、黒崎(1995)の分類基準を発展させ、共話を「共感型」、「補足型」、「先取り型」、「助け舟型」、「聞き返し型」、「言い換え型」に分類する。各共話類型について、母語場面と接触場面の「共話の断片」を分けて、それぞれの特徴を比較する。なお、接触場面の「J」は日本語母語話者、「C」は中国人日本語学習者を指す。

#### (1)「共感型」<sup>3</sup>

共感型の共話とは現行の話者が先行発話に対し、同意したり、共感を表したりする発話である。

<母語場面の例>

1K:なんていうかなこう(.)いままでと思ってきたのと違う世界に入るわけだから

2T:ああ

3K:自分がやりがいを持てるのかみたいなこう、なんかちょっ-まけ、自分に負けた気分になりそうな気がするんだけど。

→4L:あっそれはぼくも思いますね。

5K:なんかね[

6L: [一番最初に思って(.)その入った、入った理由というか、それをやるかと思って入った時の

7K:うん

8L:気持ちを最後まで貫きたいというのはまあいま入った状態だからいることかもしれないけど

9K:そうだね。

<sup>3</sup> 黒崎(1995)は「共感型」の共話について、発話形式の面ではあまり言及していないが、本研究では「たいへんですね」「難しいね」のようにつまり先行発話の内容に基づいて自分の感情を表す実質的な発話のみを「共感型」の共話とする。「そうだね」「確かにね」「ねえ」のような定型表現を「共感型」の共話とはしない。

10L:最後まで貫きたいというのがありますね。

1Kの「就職したら自分に負けた気分になる」という意見に対し、4Lは「あっそれはぼくも思いますね」と共感を示している。それを引き金とし、5Kが「なんかね」と続けて発話しようとするところへ、6Lがターンを奪い自分の共感を説明し始めた。このように、KとLは協働的に進学したい理由についての発話を構築している。

<接触場面の例>

例1

1J1:でもあれだけどね、それは無駄だったっていうと、でもまったく無駄[ではない。

→2J2: [無駄ではないよね。

3C1: [[うん。

4C2: [[うん。

→5J2:その人のためにはなるよね。

6J1:そうだね。その大学院に行ってから、あっおれ向いてねと思ったかもしれないし。

例2

1C1:うん、うん私もうん、うん文系:ですので:大学院に行っても専門的な仕事をうんうんしない限り、うん、うん、大学院に進学しても、進学しないでも、そんなに:うん変わら:ないです。うんうん=

→2J1:=変わらないかも

3C2:うんうん

4C1:または私、うんうん教育学部なので、将来は心理学勉強したいです。心理学といえば、あうんやっぱり、うんアメリカの方がうんも-日本よりもっとす-進んでいます。でも大学院に行くのはたくさんお金かかるので、最初の多分三年間か四年間のうん時間にうん会社で就職して、お金をためて、もっと留学したいと思います。

例1にでは、J1の「(自分の専門と全く関係がない仕事をしている人に対して、)今の仕事は無駄なことではない」という意見に対し、J2は1J1の「無駄」という発話のすぐ後に「無駄ではないよね」と共感を示している。その後、5J2は「その人のためにはなるよね」とさらに自分の共感を示している。それを受け、6J1は「そうだね」と2J2と5J2の共感的な発話への認めを示してから、自分の意見を展開した。積極的に共感を示しあっている母語話者に比べ、学習者C1とC2は「うん」と相づちだけうち、共話的な発話はない。

例2では、2J1の「変わらないかも」という共感的な発話に対し、C1は「そうだね」「ね」「うん」という相手からの共感を認める発話はせず、いきなり4C1のように自分の意見を展開し始めている。これは例1の6J1は自分の意見を展開する前に、まず共感を示してくれたJ2に対して「そうだね」と受け止めているのとは異なっている。

(2) 補足型

補足型の共話とは現行話者が先行話者の発話の内容を補ったり、拡充したりする発話である。

<母語場面の例>

- 1Y: 人付き合いって学ぶというなんか自然とできるというか  
→2M: 身につける:(.)努力は必要じゃない。そうでもない:  
3Y: うん: 努力[必要かな  
→4S: [あ、遊びに参加すると身につくじゃんよそれと  
5Y: [[ああ  
6N: [[うん  
→7M: みんなで遊んだりすると[  
8Y: [遊ぼうとすること=  
→9M: =そうそうそう(. )あそばねえみたいなのは(. )ね

1Yの「人付き合いは学ぶというより自然とできること」という意見に対し、2Mは「努力は必要ない」と補足している。しかし、3Yでは「努力は必要かな」と反対意見を述べている。1Yと2Mの発話を受け、4Sは3Yの発話と並行して、「遊びに参加すると人付き合いが身につく」とMとYの意見を補足している。それに対し、7Mが自分の前の意見(2M)を補足しているところへ、8Yがターンを奪い、7Mの発話を補足している。最後に、9MがYとSの補足意見を受け止めている。このように、Y、MとSが互いの意見を補足することにより、「人付き合いは学ぶというより自然とできること」という意見を広げていることが見られる。

<接触場面の例>

- 1J4: なんかお金があっても時間がない人は  
2C2: うん。  
3J4: 勉強[しようと思ってもできないし  
4J3: [あ[あ:.....:]  
5C3: [そうそう、そうですね]  
6C4: そうだよね。  
7J4: 時間があってもお金がない人[は  
8J3: [うん  
9C4: [はいはいはい。  
10C: [そうそうそう  
11J4: 進学できない。  
12J3: う(h)ん(h)。  
13J3: すごいタイミング[とバランスが  
14C4: [うん]  
15C3: [そうですね]



- 16J3:うん[うん。  
 17J4: [すごいもうたい-タイミン[グだね。  
 18J3: [うんうん]  
 19C4:うん。  
 20J4:と思う[私はね。  
 21J3: [確か[にね。  
 →22C3: [わたしは、確かねお金と時間ねやっぱり自分のきもちもゆれるんですよね。  
 23C4:そうだよね。  
 24J3:[うんうん  
 →25C3:[[どうするかってというのはやっぱり憂患あればわたしは[絶対に  
 26C4: [うん  
 27J3:確かに[ね  
 28C3:[(…)  
 →29C4:さき言ったみたいにな仕事し始めるそう[責任とかもあるしさ  
 30J4: [うん]  
 31J4:う:[::::::::::::ん  
 32C3: [そう[あるある。  
 33C4: [なんかいろいろ。

この例では、1～20では母語話者J4は「お金と時間のバランス」について意見を述べている。それに対し、C3は22C3と25C3で自分の経験を引用し、J4の意見を補足している。C3からの影響を受け、29C4はJ4とC3の意見を補足し、まとめた。このように、学習者は母語話者と異なり、相手の意見を補足することより、発話の主導権をとる傾向がある。

### (3) 先取り型

先取り型の共話とは現行話者が先行話者の発話の内容を先取りし、その発話が終わる前に発話に割り込み、先行話者とともに会話を作り上げていく発話である。

<母語場面の例>

- 1Y:進学する場合でさ、お金が、に余裕がなかったら、どうする  
 2M:なかったら、就職だよねやっぱ。進学は(.)あれだよね。あのお金のある人の遊びっていう。なれると(2.0)お金がない区点で頑張って生活する人も[  
 →3Y: [なんかあるじゃん。奨学金とか  
 4M:ああ[そう  
 5S: [そういうの(.)はなんか(°あるよ°)ね。  
 1Yの「お金の余裕がないときどうする」という質問に対し、2Mが意見を述べ始めている。途中で3Yが割り込み、2Mの発話を完成している。また、3Yの奨学金に関する発話に対しても、5Sが割り込んで、「そういうのはなんかあるよね」と補足している。このように、3Yの先取り発話はMとともに会話を作り上げるのみならず、Sの発話にも影響を及ぼしている。

<接触場面の例>

- 1C1: 日本の自転車はそ-その真ん中車で、自転車こっちでも、こっちでも両方通行できる。でも中国はうん、うんこっちならうん全部、全部、え-あ-[  
→2C2: [いや、都市]  
→3C1: [なら、ぜん-[全部あそこでこう  
→4C2: [と-都市によって  
違うじゃん  
5J1: ああ。  
6J2: ああ。

1C1が中国と日本の自転車道路の違いについて話しているところに2C2が「いや都市」と割り込み、反対意見を述べようとした。しかし、その先取りの発話が終わる前にまた3C1が割り込み、1C1の話が続いている。また、3C1の発話の途中、4C2は再び発話に割り込み、2C2の続きを述べ始めている。このように、学習者C1とC2は一時的にターンが奪われても、自分のターンを放棄せず、互いに発話に割り込み、発話を最後まで行っている。この例では、C1とC2が先取りの発話からほぼ影響を受けることなく、並行的に自分の意見を述べる。このように、学習者は他人の発話を先取りして、自分の意見を述べる傾向が観察された。

(4) 助け舟型

助け舟型の共話とは先行話者の発話の言いよどみのところやポーズのところで行話者がターンを取って、先行話者の話を続けたり、あるいは先行話者とともに、会話の展開を進めたりする発話である。

<母語場面の例>

- 1K: やっぱりその(.)自分の(.)=  
→2T: =いろいろ(.)[体験して  
→3K: [教養た-高めるってどうかその時間がね  
4L: なんか臨床医って  
5K: うん  
6L: 医者: である以前に人間として  
7K: うん  
8L: やっぱりすごいでないと[(...)し  
9T: [う:[:ん  
10Z: [わ(h)あ(h)  
11K: そうだね。  
12T: 本当だよ。

1Kは発話の途中に言いよどみ、次の発話内容を考えるために、ポーズを置いている。それに続けて、2Tが「いろいろ」という1Kの発話を続けようとしたが、後ろの言い方(「体験し

て)を考えているうちにまたポーズを置いた。そこへ3Kが2Tの「いろいろ」という発話を受け、2Tと同時に発話をし、1Kの発話を続けている。1K、2T、3Kの発話をきっかけに、4L-8LでLがまとめの意見を述べている。さらに、9T~12Tでは、K、T、ZはLの意見を認め、意見の一致に達した。このように、助け舟の発話は会話参加者が互いに協力し、協働的に会話の展開を進めていく役割を果たしている。

<接触場面の例>

1C3: でも私にはちょっと勉強っていうのはなんかつづ-[つづ-[つづつづ  
 2C4: [ああ  
 →3J3: [続けてやった[ほうがいいのかも  
 4C3: [つづけてやった  
       [ほうがいいと思って  
 5C4: [はい、はい、うん。  
 6J3: 確かにね。  
 7J4: うん

1C3は「続ける」と言おうとして「つづ-つづ」と言いよどみを繰り返している。そのとき、母語話者J3は3J3では「続けてやったほうが」と言って、C3を助けている。J3からの助けをもらい、4C3は中断されたターン(1C3)を再開し、「続けてやったほうがいいと思って」と言い直している。前の母語場面と違い、この例で、助け舟の発話は主にネイティブである会話参加者が学習者が言語問題に遭遇する際、助け舟を出し、学習者とともに会話の展開を進めていくものである。

(5) 聞き返し型

聞き返しの共話は現行話者が先行話者に意見を展開させるため、先行話者の発話について質問したり、確認したりする発話である。その聞き返しにより、聞き返された話者は自分の発話に補足しながら、会話を展開していく。

<母語場面の例>

1M: 進学するってこれさ、要するに、博士とかまでいくっていうことも考え[てんじゃねきっと=  
 2S: [ああ]  
 3Y: =うん。そうだろうね=  
 4M: =ていうとまあ一応それも(.) (° ° 最低° °)の収入のある就職でもあるんだよね。これは  
       (2.0)違うのかな  
 →5Y: どういうこと。  
 6M: 大学院に行って、博士になったら、教授とかなるってね  
 7Y: [[うん。

8S: [[ああ

9M: 大学の先生になる可能性もあるから(2.0) まあ、お金が要らない人だったら [進学も、ね。

10S:

[huh

11S: そうだね。 [お金が [よゆうがある(.) 感じなの

12N: [じゃ: お金がね。

4Mが「最低の収入のある就職でもある」という意見を述べたのに対し、5Yは「どういうこと」と聞き返している。それにより、6M～9MでMは自分の意見を展開している。この例で、Yは聞き返しを通じ、Mに「今の話を詳しく説明してください」という要請を送り、Mがそれに応えている。会話の展開において、聞き返しは相手の意見を引き出す引き金のような役割を果たしている。

< 接触場面の例 >

例1

1J1: 心理学えっ、なんかあるの心理学でもいろいろあること

2J2: うん、いろいろある

3C1: れんしょう 心理やりたいうん =

→4J2 = 臨床心理? =

5C1 = あのカウンセリング、カウンセラーにうんうんなのほう

6J2: ああ

3C1 で C1 は「臨床」を「れんしょう」と発音している。それに対し、4J2 は「臨床心理?」と C1 に意味を確認するとともに C1 の発音を訂正している。しかし、C1 は自分の発音の間違いや 4J2 からの訂正に気づかず、J2 が「臨床心理」の意味が分からないと思って、5C1 で外来語に言い換えて説明している。

例2

1J1: 日本はね歩行者は右で、自転車も左で、車も左

2J2: うん。

→3C1: 歩行者は右?

→4C2: 歩行者?

5J1: 歩く、歩く人

6C2: ああ

1J1の発話での「歩行者」という単語の意味が理解できないから、学習者C1とC2はそれぞれ「歩行者は右?」、「歩行者?」と聞き返している。それに対して、5J1は「歩く、歩く人」と「歩行者」の意味を説明している。このように、1J1～6C2において一つの意味交渉の連鎖が形成されている。

以上のように、母語場面においては、「聞き返し」により、先行発話を詳しく説明したり、補足したりして会話が展開されている。これに対し、接触場面では、学習者の言語的リソースが限られているため、コミュニケーションの支障が現れたところに「聞き返し」の発話がよく用いられ、その後の会話は意味交渉に関する連鎖になりやすいと考えられる。

(6) 言い換え型

言い換え型の共話とは先行話者の発話に対し、現行話者がほかの言い方で先行発話を言い換えたり、追加したり、まとめたりする発話である。

<母語場面の例>

1M: 人生チャレンジだからな

2N: huh。えっ、チャレンジはとつちにするの

3M えっ、進学の方にチャレンジ

4N: ああ。

→5Y: 賭ければ賭け

6M: そう、賭け-お-[

7N: [かける[

8M: [おれお金なくても生き生きしてるだから

5Yは3Mの「進学の方にチャレンジ」を「賭ければ賭け」と言い換え、Mの考え方をまとめている。それをきっかけに、Mは6Mと8Mで、「賭ける」という気持ちを詳しく説明している。

今回の調査では、接触場面において、母語話者と学習者の間で行われた言い換え型の共話は一例も見当たらなかった。

5.2 各類型の共話の使用傾向

次に日本語母語場面と日中接触場面における共話の特徴を明らかにするため、それぞれの使用傾向を比較する。

表3 場面における共話的な発話の使用傾向

(枠内の数字は共話的な発話の使用個数のことである)

共話の種類	日本語母語場面		合計	日中接触場面		合計
	トピック1			トピック1		
共感型	トピック1	15	29	トピック1	J:5 C:2	15
	トピック2	14		トピック2	J:6 C:2	
補足型	トピック1	18	37	トピック1	J:4 C:5	17
	トピック2	19		トピック2	J:6 C:2	
先取り型	トピック1	11	19	トピック1	J:0 C:0	6
	トピック2	8		トピック2	J:1 C:5	

助け舟型	トピック1	3	6	トピック1	J:2 C:0	5
	トピック2	3		トピック2	J:1 C:2	
聞き返し型	トピック1	5	13	トピック1	J:2 C:2	9
	トピック2	8		トピック2	J:2 C:3	
言い換え型	トピック1	7	10	トピック1	J:1 C:0	2
	トピック2	3		トピック2	J:1 C:0	
共話的な発話数の合計:114				共話的な発話数の合計:54		

表2は母語場面と接触場面における共話の各類型の使用傾向を比較したものである。その結果、次のようなことが分かる。

- (1) 共話的な発話数は、母語場面の方が2倍以上多い。各類型の共話的な発話も、母語場面の使用頻度の方が接触場面より多い。これについて、上田(2008)は「日本人は会話の展開において、複数の参加者が一つ発言を協働して作り上げる傾向がある」と述べている。つまり、ある発話をめぐり、様々な共話的な発話を使い、ほかの会話参加者とともに作り上げることによって、日本語母語場面の会話のframe<sup>4</sup>が形成されていると考えられる。
- (2) 母語場面でも接触場面でも最も使用された共話の類型は「共感型」と「補足型」である。日本語母語話者はほかの参加者からの共感的な発話や補足的な発話を引き金とし、積極的に会話を展開したり、さらに共感を示したりする傾向が観察され、一方、学習者は常にほかの会話参加者からの質問や確認による会話を展開するという傾向が観察される。また、学習者は他人の発話を補足したり、共感を示したりする共話的な発話をするより、自分の発話を優先させる傾向が観察される。それは学習者は日本語考えながら、発話を構築するためであると考えられる。
- (3) 接触場面において、母語話者の共話的な発話数は学習者より多く、その場合、主に母語話者同士の間で互いに補足したり、共感を示したりして、共話を行われている。母語話者と学習者の間で行われた共話的な会話は「聞き返し型」「共感型」と「助け舟型」に集中している。一方、学習者による共話的な発話は主に「聞き返し型」と「共感型」である。また、共感を示す場合、学習者が母語話者の発話を繰り返すことも観察された。

<sup>4</sup> Tannen(1993)はフレーム(frame)とは「ある言語行動を行う際にそれをもとに状況を解釈したり、それに基づいて行動(発話)したりする一連の期待の構造(sets of expectation)」と述べ、この概念が人間の相互行為(インタラクション)として談話行動の分析に有用であると主張した。(上田(2008)を引用)

### 5.3 共話の連鎖の考察

実際の会話では、一つの話段において、共話が次々と続く現象がよく見られる。複数の会話参加者はいくつかの共話的な発話によって、会話を作り上げていく。笹川(2007)はディスコース・レベルの共話及び共話の連鎖の機能について「共感表現が増幅させて」「共話的な話題交換が行われる」「先行話題を導入する」としている。本研究では、共話の研究単位を「話段」に絞り、一つの話段において、共話及び共話の連鎖による複数の会話参加者が互いにどのように言語行動を影響しあい、会話を作り上げていくプロセスを考察する。

#### <母語場面の連鎖>

##### 一人による共話の連鎖

- 1S: 今まで、あ-高校の時は特に部活:は何もせず、勉強ばかりだったんで  
 2N: [[おお。  
 3Y: [[おお。  
 →4S: あ-そう、まあ、そんなしなくてもなかったけど、まあ大学ではまあ勉強もまあ当然するとして[ほんとうに、ほんとうにいろいろなことに(.)したいと=  
 5N: [うん  
 →6Y: =例えば  
 7S: 例えば、や例えば、や本当にな-な-なん-くだらないことでいいから=  
 →8Y: =くだらないこと、例えば  
 9S: 例えちよっ-[ (咳)なんかとりあえずなんかやろうかやらないか迷ったとして=  
 10N: [気になる  
 →11Y: =何を  
 12S: いや、な(h)に(h)な(h)[にhなんでもなんでも=  
 13N: [hhhhhhhhhhh  
 →14Y: =ラグビーとか  
 15S: [[ラグビーいや  
 16N: [[huh  
 17M: huh 勧誘じゃない(h)こ(h)れ(h)  
 18S: なあ例えば、そうね。(.)あ-どういかな(.)どういかな  
 19N: う↓ん。  
 20S: なんでもとえあえず海外に(.)海外に行こうかなとか思ってる  
 21N: うんうん  
 22S: (咳)お金のことも(.)考えてもやっぱ(.)とりあえずほんとうに(.). h す:お金のこと考えてやめるんじゃないくて、とりあえずまあ(.)思ったらすぐ行こうみたいなそんなことしてみたいと(.)[思います。  
 4Sの「いろいろなことにしたい」という話をきっかけにして、6Yは「例えば」と聞き返し、Sにさらに会話を展開させようとしている。しかし、7Sは「くだらないこと」言って会話の展開を回

避けようとした。しかし、Yは諦めずに、8Yと11Yでさらに「くだらないこと、例えば」「何を」と次々に問い続けている。Yの一連の聞き返しに対し、Sは9Sと12Sであやふやなことを言ったり、笑ったりして、はっきりと答えない。このとき、14Yは「ラグビーとか」とSに助け舟を出している。Yの聞き返し及び助け舟の発話によって、Sはまず「ラグビーいや」とYからの助け舟の発話を否定し、次に20Sと22Sで再び自分の発話を展開している。このように、YはSに発話を展開させるために聞き返ししたり、相手の発話を補助したりするような共話的な戦略を使用することにより、会話を自分が望んでいる方向へ導こうとしている。

#### 多人数による共話の連鎖

1K:好きな授業って学ぶべきことだよ。それは

2T:huh

3Z:たぶん授業はいいね、楽しいから

4T:授(h)業(h)は(h)

5Z:高校のやつとかは

6T:huh

7L:本当、これも退屈[退屈、仕方がないよね

8T: [わ(h)た(h)し(h)も(h)わ(h)た(h)し(h)も(h)ま(h)高(h)校(h)

9Z: えっ高校でも[

10L: [つまらない。

11K:ああ.:なんかサボること覚えたからね。

12Z:ああ。

1Kの「好きな授業って学ぶべきことだ」という意見に対し、3Zと4Tはまず共感を示している。さらに5Zは「高校のやつとかは」と1Kの意見を補足している。5Zの補足意見に対し、7Lは「高校の授業は退屈だ」と補足意見を述べている。5Zと7Lの発話から影響を受け、8Tも笑いながら自分の共感を示している。9Zは「高校でも」と自分の意見を述べ始めようとしたら、10Lにターンを奪われ、もう一度「つまらない」と言われている。それに対し、11Kが「サボること覚えたからね」と7Lの意見を補足している。この例において、5Zの補足的な発話から影響を受け、会話参加者T、L、Kはそれぞれ他人の意見に共感を示したり、補足したりして、同調に達している。このように、日本語母語場面では、一人の会話参加者の共話的な発話が会話参加者全員の発話に影響を及ぼしている「共話の連鎖」のケースが見られる。

#### <接触場面の例>

#### 母語話者による共話の連鎖

1J1:もういや、カルチャーショックカルチャーショック



2J2: ご飯とかはぜんぜん違うの

3J1: ちが::[

4C2: [そうだ。ハンバーグとか

5J1: だね。

6C1: ファストフードとか

7J1: あでもね、俺の居た家の人はなんか昔に日本に住ん: でたことがあって、ある程度健康に気  
を使っちゃうからね

8J2: ああ。そうなんだ。よかったよかった。

9J1: よかった。よかった。

10C2: よかった。

母語話者 J1 は「留学の経験はカルチャーショックだ」という話に対し、同じ母語話者である J2 は「ご飯とかは違うの」という質問し、カルチャーショックの話の続けようとしている。しかし、「ご飯」という言葉を受け、学習者 C2 は 3J1 の発話に割り込み、「ハンバーグ」という具体例を言っている。C2 からの影響を受け、C1 はさらに「ファストフードとか」という具体例を言い、J1 の立場から、食生活に関する会話の展開を推し進めた。また、8J2 と 9J1 の「よかった」という共感を示している言葉を受け、10C2 も「よかった」と繰り返し発話している。このように、接触場面において、学習者は母語話者の発話を受け、母語話者とともに会話を作り上げていく。つまり、母語話者による共話的な発話は学習者に影響を及ぼし、学習者から共話的な発話を引き出す役割を果たしている。また、接触場面の共話の場合では、積極的に現行話者とともに会話を作り上げている母語話者に比べ、学習者による共話的な発話は量も少なく、種類も限られている。その点は 5.2 の分析結果と照応している。

#### 学習者による共話の連鎖

1C3: 本当なんか日本の大学院みたいな感じ

2J3 え ↑ え

3C4: ううん

4C3: [本当に忙しい、えっ忙しかったね

5J3: [四年間ずっと?

6C3: [そうそうそうそう[あっあつたぶんよ、四年[

7C4: [忙しかったね [えっでも [一年生二年生のときが[

8C3: [うんそうそうそうそう大変  
[だったと思う

9: J3: へえええ

10C3: どうせ[あんまり

11C4: [そんなに自由時間なかった

12C3: そうそうそうそう。あくまでは自由時間はなかった[と思う

13J3: [ああ。ほんとうに

14J4: そうなんだ。

C3の「中国語の大学生活は日本の大学院みたいな感じで忙しい」という意見に対し、5J3は「四年間ずっと?」と聞き返した。5J3の質問に対し、6C3～12C3では、中国の大学を卒業した学習者C3とC4は互いの発話を先取りしたり、割り込んだり、補足したりして、会話を展開していった。C3とC4による会話の展開において、経験がないJ3とJ4はただ聞いているだけで、あまり発話をしていなかった。このように、C3とC4は同じ経験を踏まえた一連の共話的な発話によって、C3とC4のみに属した文化的な枠を築き上げている。J3とJ4はその枠に属していないため、共話的な発話はそれほど多くないと考えられる。

## 6. 考察

本研究は日本語母語場面と日中接触場面の多人数会話における共話的な発話の特徴について考察した。その結果、母語場面においては、ほかの会話参加者との不一致を避けるために、日本語母語話者が他人の発話に積極的に反応したり、補足したりしていると同時に、他人からの補足された発話や示された共感の発話をきっかけとし、積極的に意見を展開するという言語行動が観察される。この結果は、久米・徳井・徐(2002)の「日本人は場を盛り上げた人が主導権を獲得する傾向がある」という結果及び上田(2008)の「日本語母語話者は共に発話しながら、議論されているテーマについて意見を構築していく」という結果を検証するものである。

接触場面においては、日本語学習者は発話する際に、常に頭の中で日本語を考えながら、発話しているため、自分の意見を中心に述べる傾向が見られる。共話的な発話のかわりに「うん」「そう」「ああ」のような相づち的な発話がよく使われている。共感を表している際、「楽だね」「難しいね」のような感情を込めた言葉より、「そうだね」「確かにね」のような定型表現をよく使っている。また母語話者と違い、学習者はほかの参加者からの質問や確認の上で、自分の発話を展開するという傾向が観察されている。

他人数による会話の成り行きは二人の対話より複雑である。各会話参加者の言語行動により、会話の展開の仕方も異なっている。今回の考察を通じ、母語場面でも接触場面でも一人の会話参加者による共話的な発話がどのように会話参加者全員の言語行動に影響を及ぼしている実態を明らかにした。

## 7. おわりに

黒崎(1995)では、「共話はすべてを言い尽くさず相手に発話完結の機会を与えようとする話し手側の気配りと、積極的に共感の情を表そうとする聞き手側の気配りに成り立っている。その一方で欠けた場合には、当然共話は成り立たない」と述べられている。つまり、その「他人への気配り」は日本語の共話の底にあるものである。日本語学習者にとっては、普段日本人との会話の中で、「質問—応答」「挨拶—挨拶」のみならず、相手の立場にたち、相手が言っていることに積極的に反応したり、会話の場を盛り上げたりすることも必要である。その共話的な発話をいつ、どのようにして行うのかという知識の習得も非常に難しい。

多人数会話の場面において、共話及び共話の連鎖は参加者全員により形成されているものである。今回の研究結果は日本語母語場面2組と日中接触場面2組のデータについてケーススタディーとして行った。また、共話の機能及び共話の連鎖についての分析結果はさらに検証される必要がある。

今後は多くのデータを収集し、日本語母語場面と日中接触場面における共話的な会話の展開の特徴を明らかにし、多人数会話における各会話参加者による共話的な発話の連鎖関係を明らかにすることを課題としたい。

### [参考文献]

- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』 教育出版
- 上田安希子(2008)「日本人はどのように意見を述べるのか—日米の「グループの中で意見を述べる」談話の対象分析から—」『日本女子大学英米文学研究』43 pp.21-36
- 久保田善彦・西川純(2002)「理科学習における話し合いと意味生成の研究(3)—オーバーラップの機能と発生メカニズムからの考察—」日本語化学教育学会発表要旨
- 久米昭元・徳井厚子・徐一平(2000)「コミュニケーション様式の日米中比較研究—小集団コミュニケーションの質的分析を通して—」『COE 形成基礎研究費研究成果報告』 神田外国語大学
- 黒崎良昭(1995)「日本語のコミュニケーション—「共話」について—」『園田学園女子大学論文集』30— I pp.45-60
- 佐久間まゆみ(1987a)「「文段」認定の一基準： 提題表現の統括」『文藝言語研究. 言語

- 篇』11 pp.89-135
- 佐久間まゆみ(1990a)「文段認定の一基準(II)：接続表現の統括」『文藝言語研究. 言語  
篇』17 pp.35-66
- 佐久間まゆみ(1992a)「文章・文体」『国語学』169 pp.94-101
- 笹川洋子(2007)「異文化コミュニケーション場面に見られる共和の類型」『神戸親和女子  
大学言語文化研究』1 pp.17-40
- 張麗(2009)「話者交替に見られる中国人と日本人の「自己主張」のスタイル—小集団ディス  
カッションを通して—」『異文化コミュニケーション論集』7 pp.147-159
- 徳井厚子(2002)「小集団討論場面における話題移行の影響要因—なぜ日本人の討論が  
雑談になるといわれるのか」『異文化間教育』pp.130-138
- 中井陽子(2003)「言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示」早稲田大学日本語教  
育研究』3 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.23-39
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- ポリー・ザトラウスキー(1993)『日本語の談話の構造分析：勧誘のストラテジーの考察』く  
ろしお出版
- ポリー・ザトラウスキー(2001)「相互作用における非言語行動と日本語教育」『日本語教  
育』110 pp.7-21
- 水谷信子(1980)「外国語の修得とコミュニケーション」『言語生活』344 pp.28-36
- 水谷信子(1993)「「共話」から「対話」へ」『日本語学 4月号』明治書院 pp.4-6
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰(1999)『会話分析への招待』世界思想社
- Gumperz, J.J.(1982). Discourse strategies. New York: Cambridge University Press.
- Szatrowski .Polly.(2003).「共同発話から見た〈人称制限〉、〈視点〉をめぐる問題」『日本語  
文法』3(1)pp.49-66
- Tannen, Deborah.(1993).Framing in discourse. New York: Oxford University Press.